もちを食べた仏様

むかしむかし、ある村のはずれに小さなお寺があってな、和尚さんと、こぞうさんが住んでいたと。和尚さんは大の餅好きで、誰にも食わせないでいつも一人占め。こぞうさん「和尚さん留守の間に腹いっぱい餅を食べてみたいなあ」と思っていた。

ある日、いつものように和尚さんはあんころ餅を食べたあとこっそり戸棚にしまい出かけていった。こぞうさんはそれを見ていて、一つくらい食べてもわからないだろうと思って一ツたべ、二ツたべしてとうとうみんな食べてしまった。こぞうさんは、和尚さんにどう言おうかと困っちゃった。考えたあげく、えい、仏様のせいにしちゃえとばかり、重箱の隅にわずか残っていたあんこを仏様の口のまわりにこすりつけた。

帰ってきた和尚さん、餅がすっかりなくなっているのに驚いて、こぞうさんに「お前食ったな」、「おら食わね、仏様だべ」、それが本当ならけしからん仏様だと、おこった和尚さんが棒で仏様をたたくと、クワン、クワンと音がした。「ほら仏様クワンといっているやっぱりお前だ」。そこで大きな釜で仏様を煮ると、湯がわいて来てクッタ、クッタと音がした。「うん本当に仏様だったのか」と和尚さんはあきらめて小僧さんを許したとさ。

トッピンパライのプー（長野小松まさひこ二年生）